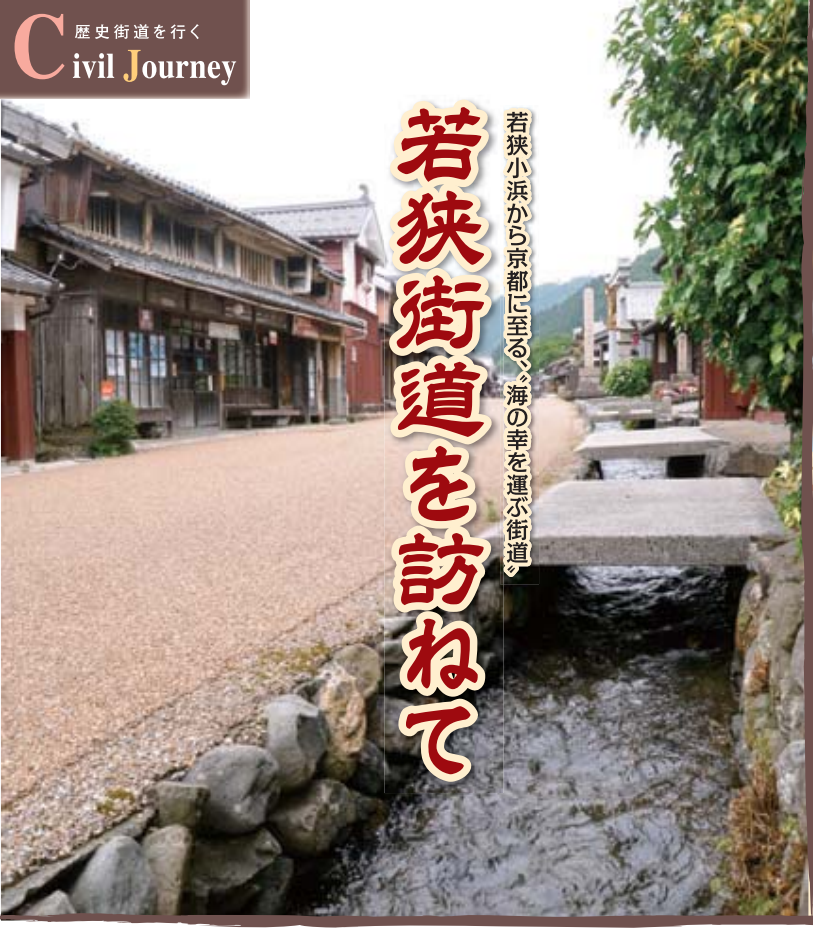


若狭街道を訪ねて

若狭小浜から京都に至る、〝海の幸を運ぶ街道〟

若狭街道は、福井県小浜市から京都市左京区（出町柳）を結ぶ道。主に国道27号、303号、367号で辿ることができる
※小浜～上中間（現在の国道27号）については丹後街道とも呼ばれている

若狭小浜から京都出町柳へと続く若狭街道は、古代より新鮮な魚介類を遠路はるばる京の都に運んでいた道として知られています。特に18世紀後半から若狭で漁獲量の増えた鯖が頻繁に運搬されるようになり、鯖街道とも呼ばれてきました。今回は、起点となる小浜からその歴史を辿りました。

若狭の商店街内にある街道の起点を示すプレート

朝廷に食料を献上してきた御食国（みけつくに）・若狭

若狭小浜は、奈良時代以前より天皇家の御食料「御贄（みにえ）」を献上する「御食国」として栄えてきました。平安時代には海上交通の要所として栄え、日本各地のみならず、大陸や朝鮮半島からさまざまな文化、物品が流入してきたため、実は文化財の宝庫としても知られています。京都に至る多くの街道や峠道には、それぞれ固有の呼び名がありますが、若狭街道は運搬物資の中でも特に鯖が多かったことから、鯖街道という名称が定着。若狭から「京は遠ても十八里※」と皆で唄いつつ、塩をまぶした鯖を徒歩で一昼夜かけ京へ着いた頃にはちょうどいい味加減になっていたといいます。そこで、日数を少なめに申告することが良い品の喧伝になったことから「さばを読む」という表現が生まれ、現在の意味へと定着したという説もあります。当時の一般庶民も、よりおいしい鯖が届くのを心待ちにしていたのです。

鯖街道は複数のルートがありますが、中でも小浜から熊川宿、朽木宿を経由し、京都の出町柳へ出る道が最も人の往来が多く、整備が進んできたとされています。

※約70数キロメートル

小浜湾から日本海を臨む。多くの鯖がここから京へ運ばれた

国道27号は舞鶴若狭自動車道と交差

商店街の中にある街道の起点

日本海を臨む小浜湾から、徒歩で鯖街道の起点であるいづみ町商店街へ。いづみ町は約400年の歴史ある魚専門店が並ぶ町です。店頭に並ぶ水揚げされた活きのいい魚を見ていると、遥か昔からこの地では、朝から威勢のいい声が飛び交っていたのだろうと当時の様子を想像できました。商店街の路面には街道の起点を示すプレートが設置されているほか、貴重な資料や写真を常設展示した「鯖街道資料館」もありました。明治から大正にかけてハンボウという魚入れを頭に乗せて町内を売り歩く魚売りや、重い荷物を持って険しい峠道を運ぶ人々の写真、計量用の棒はかりなどが展示されていました。

商店街の中にある「鯖街道資料館」。貴重な写真が展示されている

奈良・東大寺とつながる「お水送り」伝説の地「鵜（う）の瀬（せ）」へ

車で国道27号から敦賀方面へ。途中、平成26年度に全線開通予定の舞鶴若狭自動車道と交差しました。敦賀で北陸自動車道と連結することで、関西・中京圏へのアクセスが格段に高まり、交通や物流面でさらに活性化が期待されます。

若狭小浜周辺は水の名所でもあり、敦賀に至る道中には、「名水百選」に名を連ねる有名な場所が点在しています。遠敷川（おにゅうがわ）沿いに南に入り、神宮寺付近の鵜の瀬に立ち寄りました。鵜の瀬は伝統的神事「お水送り」が行われる場所として知られています。ここから遠敷川に注がれたお香水が約10日かけて奈良・東大寺二月堂の「若狭井（わかさい）」に届くとされており、毎年3月に行われる有名な「お水取り」とは昔から深い関係にあるのです。川淵に立ち、今日まで連綿と伝えられているかつての儀式に思いを馳せました。

送水神事を行う鵜の瀬公園。鳥居をくぐり中に入る

伝統的神事が行われる鵜の瀬

湧出口下から滝を見上げる。柵内は霊地のため立ち入り禁止に

神聖な水の森「瓜割の滝」の不思議

遠敷の里にある、若狭瓜割名水公園内の天徳寺にも立ち寄りました。この古刹の境内奥に、霊験あらたかな「瓜割の滝」という水の森があります。8世紀に活躍した泰澄大師の昔から、有名な冷泉として知られているそうです。

天高く伸びた杉木立の中、門前から約数分上り坂を歩くと、次第に静謐な空気に包まれていきました。ある杉の根方、岩の奥から湧き出る清流の滝が視界に入ると、何とも言えぬ涼やかで、厳かな雰囲気に。修験者の修行道と雨乞いの聖地であり、"五穀成熟諸病退散"の御利益があると信じられている"特別な場所"であることを実感しました。この滝は一年を通して水量・水温が変わらないことが特徴で、夏でも水につけておいた瓜が割れるほど冷たいことから「瓜割りの滝」と呼ばれているそうです。幾重もの地層から永い時間をかけてろ過された純度の高いミネラル水は、その保存期間においても「名水百選」の中で際立っているらしく、この名水を汲んで持ち帰る多くの人々の姿がありました。

人物改め、物資の統制、課税を行っていた熊川番所

縁台が置かれ、水路に芋洗い水車が回る昔の風景を再現

昔の街道の様子を伝える資料館もある

若狭街道の要所 県境で栄えた「熊川宿」

再び国道27号に戻り、さらに国道303号を南下。日本海と畿内を結ぶ中間地点の宿場町、熊川宿に立ち寄りました。旧道となった脇道を入れば、重要伝統的建造物群保存地区に指定された古い町並みが広がっていました。秀吉に重用され若狭の領主になった浅野長政が交通・軍事における要所だと考え、諸役免除して宿場町にしたのが、この熊川宿誕生の経緯です。あの与謝蕪村も、鯖を背負い都に入る若狭の人々の姿を多く見かけたためか、「夏山や 通ひなれたる 若狭人」と詠むほどで、当時は往来が盛んだったことが伺えます。

重要伝統的建造物群保存地区に指定される熊川宿の町並みの特徴は、街道に面して多様な形式の建物が軒を連ねていることです。二階部分の天地幅が低い「厨子2階」、柱を見せる「真壁造」、木の部分を壁で隠す「塗込造」など、印象の異なる建物が混在しながらも美しく整備され、調和していました。また、水路もこの地に欠かせない景観で、建物ごとに「かわと」と呼ばれる水利施設が設けられていました。あまり見る機会のない芋洗い水車などは、眺めていて新鮮でした。

懐かしい町並みが続く街道沿い。鯖寿司の看板も見られる

「水坂峠」標高280mの峠を越える

街道沿いに多い京都・若狭方面の案内碑

城館だった本陣を復元した「朽木新本陣」の看板

最初の難所・水坂峠を越える

京都方面に向かう際の最初の難所が、滋賀県高島市の水坂峠です。若狭街道の総距離十八里の約半分となることから九里半峠とも呼ばれ、物資の運搬者にとってはさぞ負担だったことでしょう。

道路が整備されていく現代においても、昭和60年に水坂トンネルが完成するまでは、旧道の細く曲がりくねった道を行き来していたのですから、不便が解消されたのは最近になってからと言えるでしょう。

敗走・信長の足跡「隠れ岩」「朽木越え」

国道303号から国道367号へ。高島市朽木に「信長の隠れ岩」という大岩が見られると聞き、朽木市場の通称三ツ石にある国道沿いの東斜面前に停車。地元の有志が整備した案内板と手摺を頼りに、険しい山道を上りました。すると数個の巨大な岩（全長300m）が重なった隙間にある洞窟を発見。内部の詳細は肉眼で確認しにくいものでしたが、奥行き6.6mとされる広がりは感じられました。隠れ場としては格好の場といえるでしょう。

元亀元年（1570年）、織田信長が羽柴秀吉や徳川家康を率いて朝倉義景攻めを行った際、同盟を結んでいた浅井長政の寝返りを知り、逃げ戻ったとされる朽木越え。それは、今津町保坂から大津市葛川へ抜ける裏道として街道を利用した撤退でした。その途中、地元領主の朽木元綱に敵意がないことを家臣が確認するまで、信長はこの岩窟に身を潜めていたとか。戦国時代の秘話を追体験して、気持ちが高ぶりました。

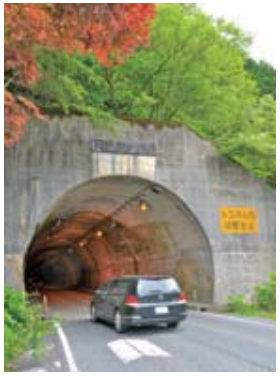
国道沿いの急斜面を上る

穴は奥へさらに広がる二重構造となっている

途中越えを経て終点出町柳に到着

途中越えは、途中峠とも呼ばれ、峠前後の道の名称です。京都市左京区大原と滋賀県大津市の境に位置し、国道367号と国道477号の重複区間となっています。標高は382mで、京都に向かう際の最後の難所。峠の北側には途中トンネルへ向かう道と集落を抜ける旧道との分岐があります。有料道路として開通した途中トンネルが平成22年に無料化されるまでは、急勾配でも旧道を利用する車が多かったそうです。

そして、最終目的地の出町柳に到着。賀茂川のたもとには「鯖街道口 従是洛中」と記された石碑があり、出町商店街にも若狭同様、街道の終点を示すプレートが設置され、若狭街道が今に伝えられています。昔は一昼夜かかっていた道のりが、今は車で2時間以内。物流が容易になった時代の変遷を経て、さまざまな物資や文化の交流がより一層盛んになり、私たちの暮らしを豊かにしてくれていることを実感した旅でした。


峠越えも現在は快適走行（写真は花折トンネル）

約2時間で京都に到着。「鯖街道口 従是洛中」と記されている、出町柳の石碑

鯖街道口の石碑がある出町橋西詰め（賀茂川）